

堀越耀介 著

『哲学はこう使う
問題解決に効く哲学思考
「超」入門』

実業之日本社、2020 年

216 頁、1,500 円（税別）

本書は哲学プラクティショナーにして、研究者でもある堀越耀介が「哲学思考アプローチ」とはなんであるかをまとめ、その応用方法について整理した一冊である。

堀越によれば、哲学思考は「批判的思考」や「論理的思考」「デザイン思考」のような様々な「思考」とは区別されるという。ただし、ちまたに溢れるそのような思考らと相反する存在ではなく、むしろ全てに関係し、「クリティカル（批判的）」なだけでなく「クリエイティブ（創造的）」な思考であるという。

哲学思考とは、けして、哲学者が学問として体系立てた思考方法ではない。哲学思考は、むしろわたしたち個人が日常生活において「もっと考えたい」と思ったことを自らの頭で考える態度と言い換えられる。そのような態度をつきつめると、自ずと学問としての哲学に通じるがゆえに、こうした態度を哲学思考と名付けざるを得ないと言ったほうが正しい。哲学思考という言葉尻だけをとりまえて、哲学者の営業行為であると理解しているような、オタク気質の哲学沼に足を取られた哲学生徒には、本書から本来の哲学思考を取り戻して

いただきたい。

本書の第2章および第3章で堀越は、哲学思考と名付けられた態度が、具体的にはどのようなプロセスをふむものであるかについて、理論と具体例を用いて紹介している。思考という単語を構成している「思う」と「考える」の違いについて、また「わかる」ということの意味と罣について、ソクラテスやフランシス・ベーコンといった先哲の知識を紹介している。

本書後半では、こうした留意点や具体例をふまえて、より哲学思考を深めていく方法としての哲学対話が紹介されている。本書前半で紹介されてきた哲学思考は、孤独の中で取り組む哲学であるとされ、以降は他者とともに考える哲学としての哲学対話が本書の中心に据えられる。本書後半の冒頭では哲学対話に不慣れな読者のために、哲学対話を深めていくためのコツが提示されている。こうしたわかりやすさが、哲学思考にはじめて触れる読者の理解を助けることは想像に難くない。

哲学思考というものが、さまざまな「思考」と名のつく社会活動に関わりのある問題解決アプローチであり、その成り立ちや具体的手法にはどのようなものがあるのかが整理されたところで、本書の最後には企業内で活躍する哲学者の存在や、哲学者がビジネスや個人の課題に貢献する「哲学コンサルティング」などの事例が紹介される。哲学思考はそもそも、個人の関心を深めていくプロセスそのものなのだから、個人や法人といった人格が哲学することは自然の理にかなっている。

考えるという行為は、一人あるいは孤独の中でもできるかもしれないが、ソクラテスのような媒介者がいることで、より深まることは哲学の歴史を紐解いてみれば明確だ。

ただ、ひとつ期待を込めていうならば、哲学対話や哲学コンサルティングが、個人や法人に対して提供した具体的な成果に対する言及があつてほしい。それこそがすなわち、哲学をどう使うのかという社会における実用価値を示すことに他ならないからだ。次作への期待が高まる読後感となった。

川辺洋平（淑徳大学）